

言語研究者としての社会への貢献

—学問の継承・展開と新たな発展—

中東靖恵(岡山大学)

1. 受賞論文の概要

2012年3月、「パラグアイ日系社会におけるアクセントの継承と変容—パラグアイの広島県人家族を対象に—」(『社会言語科学』13-2: 72-87)で第11回徳川宗賢賞(優秀賞)を授与された。本研究は、かつて登壇者が行った広島市および山陽地方におけるアクセントの世代的地理的動態に関する一連の調査研究に基づき、南米パラグアイの日系社会に暮らす広島県人家族を対象に調査を行い、日系移民社会における日本語のアクセントの継承と変容の実態とそれに関わる諸要因を明らかにしたものである。

調査は、2009年8月、パラグアイ南部 Itapúa 県 La Paz 移住地および Chavez 移住地に暮らす広島県移民(1世)とその家族(2世・3世)を対象に面接調査により行った。

調査の結果、戦後、パラグアイへ移住した広島県移民1世によって持ち込まれた広島方言の伝統的アクセントは、子・孫世代である2世・3世にもよく継承されている一方で、変容も認められ、特に世代的変動が顕著である語の多くが、広島方言で見られる共通語化と同じアクセント変動であった。「日本から最も遠い日系移住地」と言われるパラグアイ日系社会の日本語に、日本の日本語と同様な言語変化が起こっていることは驚くべき事実であり、海外日系移民社会における日本語の継承と変容の一側面として、その具体像を描き出すことができた。

日本生まれ	1世(成人移民)	1922~1945年生	【伝統アクセント母語世代】
	1世(子供移民)・2世	1946~1969年生	【伝統アクセント保持世代】
パラグアイ生まれ	2世~3世	1970~1993年生	【新アクセント獲得世代】
	3世	1994~2005年生	【アクセント型消失世代】

【図1】パラグアイの広島県人家族におけるアクセントの継承と変容の世代的推移²

1980年代以降に始まるパラグアイ日系移住地のインフラ整備や日本との人的交流の活発化、日本語教育環境の充実、メディアを通じての「日本の日本語」との日常的接触は、移住地の生活に大きな変化をもたらし、移住地における日本語の維持・継承と新しいアクセントの獲得

に寄与したと考えられる一方で、移住地と都市部とのアクセスを容易にし、移住地からの人口流出を招くと同時に、スペイン語への言語シフトを加速させ、さらには日本語のアクセントの曖昧化・アクセント型の消失傾向を促す要因³となっていると考えられ、今後、移住地の言語生活を大きく変貌させていくのではないかと思われる。

2. 当該分野の課題

2012年の夏、3年ぶりに再びパラグアイを訪れた。都市部だけでなく、農村部である日系移住地においても、1世の高齢化・減少による世代交代に伴い日常生活における日本語使用が減少し、「移民言語としての日本語」の衰退がさらに進行している様子を肌で感じる一方で、主に若い世代において「日本の日本語」との日常的接触が以前より活発に行われている様子も目の当たりにした。

一つには、従来、「継承語(国語)としての日本語教育」を行う日本語学校に非日系パラグアイ人が増えており、「外国語としての日本語教育」の必要性がより顕在化してきていること、さらに、スペイン語・日本語のバイリンガル校や、日本語を正規教科とする学校教育機関で日本語を学ぶパラグアイ人も増加し⁴、パラグアイ国内で「日本の日本語」に接する機会は着実に増えている。

もう一つには、いわゆるデカセギ⁵による訪日・滞日、日本への定住化に伴う「日本の日本語」との接触と習得、それをさらに後押しするFacebookをはじめとするSNSの急速な普及は、国や地域を越えてパラグアイ日系人のネットワークを構築する新たなコミュニケーション・ツールとして機能し、日本に暮らす家族・親戚・友人らとのコミュニケーションを行うための「日本の日本語」の習得・使用に大きく関わっていると考えられる。

³ 1992年に先住民言語であるグアラニー語が公用語に定められ、初等・中等教育での必修科目となったことにより、(場合によっては外国語としての英語学習も加わり)、日本語の学習に充てる時間が減少しているという。

⁴ 国際交流基金日本語教育 国・地域別情報「パラグアイ」(2016年度) <https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2016/paraguay.html> (最終閲覧2017年12月)。

⁵ 1990年の「出入国管理及び難民認定法」(入管法)改正以後、ラテンアメリカ諸国からの日系人の「デカセギブーム」が到来した。日本語の「出稼ぎ」はdekassegui/dekaseguiとしてポルトガル語・スペイン語に借用され、日本では「デカセギ」とカタカナで表記されることが多い。

¹ 馬瀬・小橋・竹田・中東(1995)、馬瀬・竹田・中東(1995)など。

² 受賞論文に掲載の図25(p.84)を一部改変。

このようなパラグアイ日系社会・パラグアイ日系人における「日本語」のあり方は、同じ南米諸国であってもブラジルやペルーの日系社会とはかなり様相を異にするが、そのような指摘はこれまであまり行われていない。

3. その後の研究の展開と発展

パラグアイでの調査を終えた翌年の2010年から現在に至るまで、フィールドを国内に戻し、主に以下の2つの調査研究活動を行っている。

まず一つは、山陽地方（主に岡山県・広島県）での方言の記録・保存および継承・変容に関する調査研究である⁶。全国共通語化に伴う各地方言の衰退・消滅の危機が叫ばれる中、方言研究のあり方も、日本語における方言の位置づけも大きく変わりつつある。過去に行われた研究成果によって明らかにされた地域言語の実態は、長い時を経てどのように変容しているのか、また、消滅の危機に瀕する方言を継承するためにも、方言の記録・保存を行うことは喫緊の課題であり、地方自治体における伝統文化継承事業の一環として取り組む地域もある。

これと並行して行っているのが、岡山県内のブラジル人・ペルー人集住地域である総社市における地域日本語教育に関わる調査研究である。1990年の入管法改正以後、総社市にはニューカマーとして多くの南米系外国人が暮らし始めたが、2008年のリーマンショックによる経済危機により、その多くが失業し、それを契機に行政である総社市役所を事業主体とする「生活者としての外国人」のための日本語教室を立ち上げることとなった（中東2016）。文化庁委託事業として事業運営を行う傍ら、総社市に暮らす外国人の言語生活（中東2014）、多文化共生の現状と課題、企業で働く外国人就業者の日本語教育支援に関する調査などを、自治体の協力の下で実施している。

4. 本学会に期待すること

学生時代、恩師と共に故郷広島で行った方言アクセントの動態研究は、やがて広島から南米に移住した日系移民の方言アクセントの継承・変容研究へと展開した。南米日系社会での研究はその後、日本に暮らす南米系外国人の言語生活や日本語教育支援に関わる調査研究へとつながり、方言の変容研究は、時を経て、追跡調査研究および方言の保存・記録・継承活動へと発展している。

地域における言語変容の実態を捉えたいという中心的な関心は一貫しているが、言語を取り巻く社会・文化・教育だけでなく、特に海外日系移民社会における言語変

容を考える際には、人々の移動に関わる政治・経済・歴史的観点も重要となる。また、現代社会における言語の動態を捉えるにはメディアの発達と社会におけるその機能・役割も見逃せない。真理を追究したいという思いは、自然と、言語学以外の学問領域との接点につながった。

「トランスディシプリナリーな学会」である本学会において「学問の共和国の分裂の危機は、はじめから内包されている」と創設者の徳川先生は危惧しておられた（徳川1998）。登壇者は幸運にも、言語学以外の様々な学問分野の専門家との共同研究を通じて多くの学びを得る環境に恵まれた。学問の共和国の分裂の危機を経験したからこそ、学問を継承しながら、自分なりに発展させ、新たな領域を開拓するきっかけになったように思う。

近年は地方自治体との共同事業に携わる機会に恵まれ、研究者ではない行政職員や一般市民らとともにプロジェクトを推進する役目を担うことが増えてきた。こうした経験を通じて、研究者として地域社会の発展にどのように関わり貢献することができるのか、研究者自身の関心事も大切ではあるが、研究の成果を還元されるべき主体の視点に重点を置いた問題意識の持ち方、研究のあり方や方向性、研究成果の共有方法を考えるべきではないか、そのプロセスを通して、自ずと研究の意義や社会的な有用性が見出されていくのではないかと感じている。地域とともに育む研究の成果は、主体である地域の人々に還元され、共有されてこそ意味を持つのではなからうか。

学問分野の異なる人々、そして研究者以外の人々との対話の場を創ること、研究成果が社会の発展に寄与する方法を議論し、模索し続けるとともに、学会に集う多様な人々が互いに歩み寄ることでオリジナリティのある研究を進展させる場が構築されることを本学会に期待する。

引用文献

- 馬瀬良雄・小橋裕恵・竹田由香里・中東靖恵（1995）. 広島市方言における語アクセントの動態 音声学会会報, 210, 1-15.
- 馬瀬良雄・竹田由香里・中東靖恵（1995）. 山陽地方岡山—広島—下関ライン方言アクセントグロットグラム（地理年代図）集 フェリス女学院大学馬瀬研究室
- 中東靖恵（2014）. 岡山県総社市に暮らすブラジル人住民の言語生活—外国人住民の日本語学習支援を考える— 社会言語科学, 17(1), 36-48.
- 中東靖恵（2016）. 岡山県総社市における「生活者としての外国人」のための日本語教育事業の立ち上げと展開—行政と取り組む地域日本語教育の仕組み作り— 岡山大学文学部紀要, 66, 37-53.
- 徳川宗賢（1998）. 「社会言語学」の創刊にあたって 社会言語科学, 1(1), 1

⁶ 2010～2015年度国立国語研究所「方言の形成過程解明のための全国方言調査」での共同研究、2012～2013年度岡山県井原市における『井原の方言集』の監修、2017～2021年度科研・基盤研究(B)『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査による音声言語地図の作成と言語変容の研究での共同研究。